



蔦谷栄一 著

『オーガニックなイタリア
農村見聞録』

『オーガニックなイタリア 農村見聞録』。一風変わった書名である。肩肘張らずに気楽に読めそうな本である。実際、気楽に読めた。しかし、それは安易に読めたということではない。実に楽しく、心豊かに読めたのである。

蔦谷氏の書かれた本、論稿はほとんど読んできたつもりであり、読むたびに啓発されたり、感銘を受けたりしているのだが、この『オーガニックなイタリア』は氏がいままで書かれたものと比べても、文章が生き生きとしており、実に奔放で、しなやかな輝きがある。氏は『エコ農業 食と農の再生戦略』（家の光協会、2000年）、『日本農業のグランドデザイン』（農文協、2004年）などの著作を通して日本農業の進むべき道筋を提言してきた。それらには氏の描くビジョンの骨格が示されている。ビジョンの骨格とはいわば舞台装置のようなものだ。それだけでは劇は始まらない。役者が要る。ストーリーには人間が存在しなければならない。この本にはその人間が描かれている。描かれているのはイタリアの有機農業生産者の生き様であるが、生き様に国境はない。

さて、本書の成り立ちを簡単に説明したい。本書は2004年と2005年に夏休みを利用して奥方と二人でイタリア各地の農村を旅したときの見聞がベースになっている。訪問先はイタリア全土にわたり、北から南まで16か所の土地を訪ねている。

そこで見聞したイタリアの農村の現実には、過疎化、若者の流出、安価な輸入農産物との価格競争など日本の現実とよく似ている。農産物貿易の自由化は先進国の農村に共通の問題を生起しているようにも思える。ところで、イタリアは小規模零細農家が多いこともあって、EUのなかでも独自の農政を指向しているようであり、2002年にはEU共通農業政策から少し距離を置き、市場化を前提とした価格支持政策から地域の発展を重視する農村開発政策重視へ方針転換を図ったという。

そのような地域重視の政策転換の援護もあってか、イタリア各地で地域再生に向けての取組みが出現しているように見受けられた。イタリア各地の取組事例に共通していることは、活動内容が生産にとどまらず、加工・販売、アグリツーリズムによる都市住民との交流活動、食文化、伝統文化、街並みなど地域の価値を再発見する活動まで非常に幅が広いことである。そこでは地域農業の再生と地域社会の再生が一体となって進められている。蔦谷氏はイタリアの地域社会農業への取組みを紹介しながら、日本の政策においても地域性を重視することの大切さを唱えているのである。

ところで、本書は現地の方々との食事の場面が多く、飲み、食べ、語らいの調査の旅であることが伝わってくる。村人との語らいの声が聞こえ、食卓に並ぶ料理やワインが目に見えようである。読者はオーガニックなイタリアの農村を著者と一っしょに旅しているように、きっと感じるに違いない。

家の光協会 2006年8月

1,680円（税込み）215頁

（取締役調査第一部長

鈴木利徳・すずきとしのり）